

全体会

【総合コーディネーター】	田端 和彦氏	(兵庫大学副学長)
【発表者】 第1分科会	飛田 敦子氏	((認特) コミュニティ・サポートセンター神戸)
第2分科会	実吉 威氏	((公財) ひょうごコミュニティ財団)
第3分科会	畑本 康介氏	((特) ひと・まち・あーと)
第4分科会	中山 光子氏	((認特) 宝塚 NPO センター)
	小川 奈津美氏	(兵庫県立大学看護学部)
第5分科会	柏木 登起氏	((特) シンズ・シーズ / (一財) 明石コミュニティ創造協会)
第6分科会	小嶋 新氏	((特) しゃらく)
第7分科会	東 朋子氏	((特) コミュニティ事業支援ネット)
第8分科会	頼政 良太氏	(被災地 NGO 協働センター)
第9分科会	三井 ハルコ氏	((特) 市民事務局かわにし)

田端

皆様、グループワーク、大変ご苦労様でした。地域で活躍されるたくさんの方々ですので、議論が盛り上がったのではないかと思います。ファシリテーターの皆様もお疲れ様でした。

これから、第1分科会から順に、どのような議論があり、どのような結論が得られたか、あるいは、結論までいかないけれど、こういうところは皆さんで協力できたというところを2分程度でお話してください。

飛田（第1分科会）

「地域課題解決につながるコミュニティビジネスの展開」をテーマに、どのようなビジネス手法を使って、地域課題を解決するかについて話し合いました。

ゲストに、高齢者の生活支援のコミュニティビジネスを展開されている(特)福祉ネットワーク西須磨だんらんの日笠昭子さんと、丹波で野菜の流通のコミュニティビジネスを展開されているパンチファームの山内延浩さんに事例報告をいただきました。

それぞれ色々な話がありましたが、まずはどういう風にニーズを探していくか、そのニーズに対してどういうサイズのコミュニティビジネスが展開できるのかということをお話しました。

その中で、猪名寺自治会会長(尼崎市)から、高齢者のための生活支援を行うにあたって1,000戸にアンケートを取ったところ、生活支援に関する家の掃除などのニーズが出てきたので、それをもとに近々生活支援サービスのプログラムを立ち上げたいなど、非常に臨場感溢れる話をいただきました。

あとは、お金の設定。コミュニティビジネスでは、お金を取って継続的に資金化しないといけません、値段設定がすごく大変だったということで、実際、最初は30分500円くらいの生活支援のコミュニティビジネスを始め、1,000円、1,200円と徐々に上げていったという話がありました。



とりあえず 500 円でいってから考えようということも含めて、ある程度ニーズ把握は必要だが、走りながら考えるというスタンスも大事ではないかという話もありました。

実吉（第2分科会）

第2分科会「公益活動への寄附・投資等による地域経済循環」では、参加者が8人で小規模でしたが、非常に面白かったです。ゲストには、西宮市で保育事業を行い、今年で39年目になる（認特）はらっぱ理事長の前田公美さんと、（認特）しみん基金・KOBEの江口聰さんにお越しいただき、まず、前田さんからは、どうやって組織を作り、お金を集めてきたのか、という話をさせていただきました。

江口さんからは、今の時代、寄附を集める新しい仕組みの様々な事例紹介をしていただきました。

一般参加者が5人のうち、過半数3人が学生ということで、どうやってNPOをやっていくのかという勉強会に半分なりかけていましたが、南あわじ市で中間支援をやりつつ、直接事業もされている、参加者の（特）SODAの喜田憲康さんからも、色々面白い仕事づくりの話もしていただきました。

前田さんからは、とにかく理念をしっかりと、自分たちが何をやりたいのか、そこをしっかりと持つべきという話がありました。前田さんは、今でも過去2年間、毎年500、600万円の寄附を集めています。その約9割は知り合いやこれまでの寄附者、かつての利用者、職員とかだそうです。

一方、NPOを簡単に地域の経済循環に結びつけない方がいいのではないか、という意見も参加者から強く出て、結論は出ませんでした。

畑本（第3分科会）

我々第3分科会は、「地域資源の発掘・発信」

という切り口で議論をスタートすべく、前半少しだけ情報提供者として、播磨町で団地を再生した若い30歳、合同会社roofの佐伯亮太さんに来ていただきました。

そこでの学びとしては、言い換えによって地域資源が見つかるのではないかというお話。商店街には、昼の時間は仕事をしている若い人が来られない。夜にナイトバーをすることで活性化する商店街の事例も学ばせていただきつつ、理想の再配置の議論をさせていただきました。

その中で、言い換える練習をさせていただきました。例えば、子どもが少ないという言葉を取り上げ、実は子どもも少ない、だからこそ子どもたちを村全体で手塩にかけて大事にして育てることができる、という言い方もできるよねというところから、頭の体操をした格好です。

話の中で、本当は担い手がいるのではないかという、別の分科会で議論するようなことが登場しながら、それにはお金が必要、というところで話が広がりつつ、でもそのためには繋がりがあれば何とか、先程の理想の再配置というのが促せるので、発掘・発信っていうのが効率よく、色々な人と手を取り合いながらやっていけるんじゃないかっていう結論のような、結論じゃない話にひとまず落ち着きました。

中山、小川（第4分科会）

（中山）

第4分科会は地域の人材養成ということなので、ファシリテーターの私が話さずに、これからの人材を養成していくためにも、小川さんに話してもらおうと思います。

（小川）

兵庫県立大学看護学部で看護を学んでいる4回生の小川と申します。今回参加して、私を感じたことを3つにまとめます。

人材養成について、今回、県内の田舎から都会まで色々な地域から参加された方々のお話

を伺った中で、これまでの形を持続していくことは難しいだろうということがわかりました。

その中で今、青年団に入る若者が少なく、婦人会も減っている。そうしたことから、今後違う形に変えていくことが必要ではないかと。

例えば、ボランティアを有償にするなど、やる気を養っていく方向が必要ではないかという意見が出ました。

また、やりた
いことを一緒
に支援してい
く、そういった
アプローチを
していくこと



で人材育成につながるのではないかという意見が出ました。

また、最後に何よりこれが大切ではないかと思っただことは、やっている本人が楽しいと思えるかどうか。そうした活動かどうか、今後もその活動を繋げていけるのではないか。できる環境を作っていくということが、現在、活動されている方にとって必要な考えではないのかなということも学ぶことができました。

(中山)

私も気がついたことは、私たち世代が、またその上の方たちがやってきた地域活動と、これから若い方ができる地域活動は違うのではないかということ。若い人もできる地域活動、市民活動をどうやって、今、活動の中心になっている60代、70代の重鎮の方たちが、どうやっていくかということです。

柏木（第5分科会）

「地域団体・NPO等の組織マネジメント」というテーマで、地域側から魚住まちづくり協議会の川島幸夫さんと、NPO側から姫路コンベンションサポート理事長の玉田恵美さんに組織マネジメントについて事例発表をいただきまし

た。

組織を動かすのは人であり、人と人の繋がりを大切にしないと組織マネジメントは難しい、というところから話が始まりました。

いくつかのポイントがありますが、まず一つはトップダウンではなく、自分で決めさせることを大事にしているという話がありました。そのために、焦らずに緩やかで丁寧なプロセスが重要だということです。

その重要なプロセスにも関わることですが、NPOと地域団体とは、全然組織は違いますが、共通していることもいくつかあります。一つは両方ともビジョンやミッションのブランディングを相当されているということ。そのときに、やはり色々な人が意見を出せるように、第三者のファシリテーター的な役割に両方とも入ってもらったという話がありました。

もう一つは、NPOも地域団体も、メンバーや市民参加を増やしていかなければなりません。やる方が楽しそうに進めないと市民も巻き込まれていけないので、楽しそうに進められるかどうかは鍵で、そのために、個別に声を掛けていくということがあります。

もう一つ、NPOもまちづくり協議会も事務局の役割が重要で、事務局が声掛けしたり、調整したり、コーディネーター役にどれだけ成りきれるか、というような話となりました。

小嶋（第6分科会）

ゲストに、朝来市総合政策課の馬袋真紀さんと竹の台地域委員会（神戸市）から森川賢子さんと浜尚美さんにお越しいただき、「公益活動の評価の仕組み」をテーマに、評価について真正面ではなく、いわゆる地域団体が生み出す社会的な活動に関しての評価ができるのか、ということを議論しました。

その中で、いわゆる自治会や地域団体は、NPOと違って、元々ある意味ではつくられた団体で

あるということが出ました。いわゆる元々市民が主体となって何かをするというか、元々行政がつくった中で、最終目的って何だろうかというところで、まず話が進みました。



そこから出たのは、市民がここに住む安心・安全感をどうやって熟成するのかということが、地域団体の目標の一つではないかということでした。

定義が二つあって、人と人の繋がりや助け合いの場をどうやってつくっていくかという点の一つ。もう一つは住民がその団体に対して、その団体が実際に地域を変えていくことができるという期待感があるかという点です。

各活動をどうやって他人が評価できるかというと、例えば、地域団体が頑張ることによってその地域への移住が進むケース、もしくは、まち全体の価値が多少なりとも向上する、あとは、行政コストの削減ができる、ということです。

住民福祉をどういう風に増やしていくかという観点や、各事業に関してはわかりますが、そこへ繋ぐ中間目標をどうするのかという管理に関しては、今後の一つの課題だろうという話になりました。

東（第7分科会）

「多様な主体の協働」をテーマに、ゲストをお迎えし、多様な主体が協働することで相乗効果が期待できるのはわかるが、現状と課題、展開の可能性の取り組みについて意見交換を行いました。

行政の立場からは、西宮市市民協働推進課課

長の谷口博章さん、企業の立場からは阪神友愛食品株式会社代表取締役社長の河崎紀子さん、学校の立場からは西宮東高校校長の奥村政浩先生、地域組織の立場から尼崎社会福祉協議会の杉本善希さんの4名の皆様から事例と課題、今後の取り組みについてお話しいただきました。

困っていることも色々出てきました。例えば、行政の皆さんの協働に関する意識がない、ということはもう長い間言われていますが、すごく熱心な方と熱心じゃない方がいるという、偏りがあることが問題です。

福祉サービスだけではなくて、地域と障害者が上手く社会に溶け込んで参加していく、繋がっていくということがなかなか進んでいないという話もありました。

市民が求める協働と行政が求める協働のミスマッチは、まだまだ続いているということや、後継者や次世代のリーダーの育成は難しい、というような課題も出てきました。

最終的にまとまった、まではいかないですが、意識改革が大事という話がありました。課題を共有し、話し合い、同じことに向き合っていくということが、多様な主体の協働にはやはり大事なんだということです。ゴールや成果についても同じ方向を向いて走っていくことが大事だという話もしました。

とても印象的だったのが、地域はコーディネーターが重要という話が出たときに、コーディネーターって何？という問いも同時にありました。地域って繋がっていかないと何もできないから、コーディネーターは要らない、それが当たり前だという話も出ました。横に繋がろうとする意識を子どもの頃から育む教育も大事だということも話題になりました。

頼政（第8分科会）

テーマは災害ボランティアで、ゲストは、ひ

ようごボランティアプラザ所長代理の鬼本英太郎さんと神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti の稲葉滉星さんの2名にお話をいただきました。

災害ボランティア活動が社会福祉協議会(以下「社協」という。)の災害ボランティアセンターだけでは難しくなっている、ということが一つありました。社協が管理するというよりは、もっとボランティアの多様性を発揮できる仕組みが必要ではないかという話がありました。

学生からも、災害ボランティア行くのはハードルが高いので、もっと役立ちたいと思っている人たちが力を発揮できる仕組みができればいい、という話が出てきました。

そういう中で、今日参加されているアーティストの石田裕之さんから、普段あまり防災のことを考えていない人たちにも、日常行っていることから防災のことを考えてもらおうと、来年4月6日に音楽フェスティバルの中で防災を考えるというイベントを行うので、皆さんに参加していただきたいという、取組の紹介がありました。

最後に、行政の支援については、少し弱いのではないかという意見が出てきました。こういったボランティア活動が、実は災害時にはとても重要な活動になってきているので、そこをもっと行政に支援をしていただいて、兵庫県モデルみたいなものを全国に発信できるような、そういった取組ができるといいのではないか。

例えば、参画協働セクションの応援というのは、災害時にないのです。土木とか管理の応援はどんどん行くが、参画協働ももっと応援に行くみたいな仕組みがあってもいいんじゃないか、という話も出ました。

三井（第9分科会）

「行政への協働」とのテーマですが、「行政と

の協働」ということで進めさせていただきました。

20年前、NPOができた頃は、よく「新しい市民社会を拓く」という言葉を聞きました。本当に私たちは新しい市民社会を拓いてきたのだろうか、協働の形も色々だと思いますが、この20年があったからこそできたことと、これからも必要なことを、事例発表を聞きながら皆さんにポストイットに書き出していただきました。

全体のコメンテーターとして、近畿大学総合社会学部准教授の田中晃代先生にお願いしました。ゲストは、最初は、飛田協子さん。(特)北播磨市民活動支援センター理事・マネージャーであり、うるおい交流館エクラ(小野市)の指定管理でも、男女共同参画の部分では委託でも事業をされておられ、それらの事業についてお伺いしました。

2番目には、近畿大学3回生の檜崎梨奈さんと森山達天喜さんに発表いただきました。川西市北部に黒川という場所がありますが、そこで地域活性で何かできないかと、田中先生のご指導の下で、今、古民家を使った「すみっこカフェ」を運営しておられます。そこで行政と協働して進められている事例を発表してもらいました。

3番目は、(特)コミュニティリンク理事の松村さんに、ICTを使ったまちづくり、20年前には考えられもしませんでした。これからのあり方として事例発表いただきました。

今年度、NPO法制定から20年ということで、県内ではこの後、「地域フォーラム」や「全県フォーラム」が開催されます。そこでも議論を深めていただければということで、今回は、提供いただいた事例を皆で共有することをメインにしました。

田端

ありがとうございました。9つの分科会でどのような議論があったのか、議論の様子はお分かりいただいたと思います。

今回、事例を発表してもらい、そこからスタートしていくという所は、各分科会に共通していたと思います。

最初に、山崎亮さんの基調講演の中に、社会福祉の話が出てきました。社会福祉は、やはり経験を基にする学問です。そういう意味では、山崎さんが提起されたこれからのグループワーク、ワークショップどうやって進めていくのかというときに、一つの考え方としてそれぞれ持っている事例をまず出してもらって、そこから何かを見つけていくというところは、少し皆さんに共通していたと思います。

私も聞きたいことがあります、これだけの方々がいるときに、私が聞くよりも、お互いまず聞いていただいた方がいいと思いますので、どなたかいかががでしょうか。

飛田

では、実吉さんにお聞きします。といいますのも、コミュニティビジネスの分科会を行う中で、お金のことが結構、話し合われました。第2分科会では、多分お金の集め方みたいなことを議論されたと思いますが、その中で、お金の集め方のキモを話し合われたのであれば、実吉さんの考えも含めて、お金集めとこれからの地域づくりの金集めのキモはこの辺というのがあれば教えてください。

実吉

恐らく今のご質問に二つの答えがあると思います。

一つのお金の集め方のキモは、例えば、ふるさと納税。返礼品がすごい動機付けになっています。メリットがあるよ、というお金の集め方

が多分一つのキモだと思います。やり方の話です。

恐らくもう一つのキモは、あなたに出してもらうことでこんな社会が実現するとか、一緒にこんなことを実現しようという夢であったり、難しい言葉では互酬性といいます、お互いそれで助け合いになったり、といったものです。

第2分科会では、どちらかといえば、二つ目の方が大事なのではないか、と。対価というのはマーケットの世界の話で、そっちにNPOがどんどん行ってしまっているのだろうか。そこまでの議論はしなかったですが、若干僕の意見も込めて。第2分科会のテーマには、主催者から地域の経済循環と記載されましたが、参加者の中から、あるいは私も、そんなに経済、経済と言わない方がNPOはいいのではないかと。

むしろ、一緒になって地域のために、これは他の分科会にもすごく共通すると思いますが、どんなことができるのか、それがお金を集めるときにも大きなキモになるのではないかと思います。

田端

実吉さんのところは、共感寄附というキーワードを一つもって活動されてきましたが、先程の二番目の、価値をいかに高めていくかというところで、共感していただくことの重要性を教えてくださいました。

小嶋

第3分科会について。基調講演における山崎さんのコミュニティデザインにしてもそうだと思いますが、ある意味、新しい参加の手法を地域に提案していくことだと思います。

僕たちがやっているのは、いわゆる地域団体、昔ながらの「まち」をどう作っていくかということですが、コミュニティデザインなどの新しい切り口から入ってくる地域づくりの担い手

と、昔からの地域団体の地域づくりの担い手はうまく交差しているのかどうかを、本気でお伺いしたいです。

田端

恐らくテーマ型、地縁型の団体の結びつきというのは、どの団体も、あるいは皆さんも関心があることだと思いますので。本気で話していただけますか。

畑本

その部分に関しては議論が深掘りできていないので、私見といいますか、私たちの活動から来る話にはなってしまいますが。

一つのやり方としては、うちでは昔、未来というキーワードを使っていました。昔から繋がってきている歴史ですとか、例えば、どういったいきさつでその地域団体がスタートしたのかとか、誰がスタートさせたのかとか。今までできていた活動世代とこれから担ってもらう活動世代の種類が違うのではないかという話に通じるものがありますが、だからといって、繋がらない形で新たな活動団体と地域団体が、パスを出す、受け取る、新たなことをするというのは変だと思しますので、これから前のパスをバトンを受け取っていく、学ばせていただいた上で、そこに積み上げさせていただくというような考え方が重要だと思っています。

第3分科会では、地域資源の発掘っていう部分がまさに、実は活動されている団体の歴史そのものも、実は地域資源とも捉えていますので、こんな感じで綺麗にまとめてもよろしいでしょうか。

田端

自治会や町内会など、先代からの組織ですから、そういったものをどう活性化していくかというときに、先程積み上げたというところでだ

いたいよろしいでしょうか。

柏木

今の話と同じ話が第5分科会でも出ました。魚住まちづくり協議会の方は、自治会出身ですかという質問がありました。元々はテーマ型の活動の参加でしたが、自治会と繋がっていくためには、自治会に参加して、自治会の役員を務めたという話もありました。

そういう意味で、コーディネーター役が重要だと話をしました。新しいコミュニティビジネス、コミュニティデザイン、ソーシャルビジネスみたいな観点と従来からの自治会の両方を大事にできる真ん中の役割みたいに、繋ぐ役目が重要ではないかと、分科会では話をしました。

中山

柏木さんが言われた、これまでの活動と新しい活動での参加の仕方というところは、私たちの事例でも一件ありました。

宝塚市に阪急電鉄の小林駅があります。その駅の花壇については、これまでまちづくり協議会の60~70代の方々が支えていました。地域の若い世代にも入ってほしいということで、その花壇の前に、ファミリープランターを置くことを会長が提案されました。

最初は、今までの活動を否定するのかという意見もありましたが、会長は其中で色々挑戦されて、そのファミリープランターには週1回、月1回、家族で世話をするという新しい活動が生まれました。多分そうやって色々な活動が継承されていくのだらうと思いました。

それはNPOや地域活動のマネジメントにもぴったり合っていて、そういう事務局機能というのが、今後大切になると思います。

東

まさに同じような話が私たちの分科会でも

出ました。コーディネーターが必要という話の中で、井吹台自治会連合会（神戸市）の坂本さんから「コーディネーターというよりも地域は当たり前前に繋がっていかないと活動できない。当然、その中にコーディネーター役の人がいて、コーディネーターという名前と呼ばなくても、協働は当然している。」という話がありました。

そのとき、多分、市から参加された方から「地域の中は当たり前のように繋がっている。例えば、地域を越えたとき、テーマ型のときに、より一層、いわゆる横を繋げるコーディネーターという役割を持つ人が必要、というような話になりました。

田端

ある意味、うまくまとめていただいたと思います。コーディネーターは、地域を結ぶだけではなく、世代を結ぶという役割を果たします。地域型は実はそういうような方が内在されているが、それがなかなか見えてこないところがあります。テーマ型の段階では、やはり難しい課題であるというところが見えてきました。

三井

第6分科会の小嶋さん。公益活動の評価の仕組みについて教えてください。

私たちは、指定管理事業でも評価のあり方というのは本当に難しいと感じています。大方は、量的評価として数で表されることが多いけれども、これだけ成熟してきたら、質的評価をもっと考えなければならないと思っています。そういうことを皆で考えよう、みたいな機運はなかったでしょうか。

例えば、施設に来られる人数の変化も捉えています。来所される方々の声を直接、細かく拾って行って分析してみる、あるいは、「館」「施設」の存在が「まちづくり」にどう影響を与えているのかを分析するなど質的評価に

繋がっていくと思っています。

小嶋

先程、朝来市の馬袋さんから、アイテムを増やしていくという話がありました。たまたまCBに関心はあるけれど、ボランティアには関心が無い住民もいる。一方で、例えば、子育てには関心があるが、CBには関心がない、そういった色々な住民が色々な地域にいる、ということです。

僕たちのようなNPOは支援する住民を選ぶことができますが、地域はそうではないと思います。そうした場合に、色々な住民が関われるように、アイテム数をいっぱい増やしていく。アイテム数を増やすと、関われる人が増えて、関われるとまた次の展開が生まれる。そこから人数を拾っていくというようなことを、ゲストスピーカーの方々も言われていました。

田端

ありがとうございました。特に、この中にも指定管理を行政から委託されているところで、人数だとかお金のことだけ言われて、非常に頭を悩ませるといえるときに、小嶋さんが言われていたアイテム数、多様性というものをどう評価していくのか。これが非常に重要ではないかというのは、よい視点だと思います。

まだまだご質問があろうかと思いますが、参加者の皆さんからご質問があればお願いしたいと思います。

質問されるときに、名前と所属と質問内容を説明いただきたいと思っています。自分

の活動を広げたいという気持ちもわかりますが、それはできれば次の交流会でさせていただくよう、よろしくお願いします。



永菅（棚田 LOVER' S）

中山さんと小川さんにお聞きしたいのですが、私たちのグループでも、自治会の中で一生懸命されていて輝いていると、協力したくなるということや、子どもたちが手伝ってくれたという事例がありました。

若い人や高齢者の方々をいかに人材養成していくかという話が大事だということでしたが、先程のアイテムを増やすにも関わってくると思いますが、どう地元の、あまり地域に関心のない方を育てていくのか、参画する仕組みなどがありましたら、参画と協働を進めていくにあたってのアドバイスをお願いします。

中山

私たちの分科会で、西脇市から参加された方がおられました。その中で、すごくああそうかと思ったことがありました。地域の中に参加していただくというのは、何かの枠組みの中に参加していただくのではなく、365日の中で1日でもいいから参加して、1回でもいいから参加して、そうやって広げていく、というような話をされて、本当にそうだと思います。皆が忙しくなっている時代に、そういう参加の仕方を、文句をいかに減らすかということが、参画と協働に繋がるのではないかと思います。

小川

地域での話ですが、もう少し視野を広げる意味で、地域外からのボランティアも含めてみてはどうかと思いました。年に1回とか月に1回とか、その方が参加しやすい方法で。地域外の方でもその地域が好きだという方はおられると思います。そうしたところからファンを増やして、色々な形で行えば、より地域の方が「うちの地域ってこんな魅力があるんだ」という気づきのところから進めていけるのではないかと、今回、話を聞いた中で思いました。

田端

ありがとうございました。他にあと1人だけご質問があればお受けします。せっかくの機会ですので、いかがでしょうか。

では、私から一つ、中山さんにお聞きしますが、若い世代、それから、永菅さんからご質問があったキラキラ輝く人とか、若い人がどう楽しくやっていくのか。これが恐らく、ここに書いてある更なる展開を広げていくためには、絶対必要だろうと思いますが、何か心がけていることがあれば教えてください。

中山

私が、というよりも、分科会で発表いただいた養父市の事例ですが、地域おこし協力隊の方々がそこに住み、結婚され、地域の中で色々活動もされています。

なぜそういうことができるのか、と私は養父市に通いながら外から見ていると、地域の方々が好きなようにやらせているなど。そして、地域の人たちが実は好きなようにやらせていながらも、底を支えていたり、地域の活動のいろはをこっそり教えたり、そんなことをされているように思います。

それがきらきら輝いているかどうかはわかりませんが、持続可能な活動になるのではないかと考えています。

田端

ありがとうございました。多分、中山さんも恐らく自分の活動もうまく周りの人に支えていただきながら、動いておられると思うので、この意見も参考になったのではないかと思います。

長時間にわたり、皆さんのグループワークの後、9人のファシリテーターの発表、そしてディスカッションをさせていただきました。

今回のテーマは更なる展開ということで、ど

う次に繋いでいくかということが一つ課題でした。それについては、人材育成も3点ですとか、先程アイテムを増やす、要するに幅広く枠組みを作っていく、そして、支えていくことが重要というのが出てきたと思います。

また、展開するためにはどうしても資金が必要になってきます。その資金をどう集めていくのかということ、単に、コミュニティビジネスが大事、経済循環も大事ですけども、それ以外にやはり理念を持っていること、ここが強みだということになります。

では、これをいかに参画と協働に結びつけていくか、行政も含めて参画と協働に結びつけていくのかということが、次の課題になっていきます。若干いくつかヒントがあったかなというふうに思います。例えば、三井さんの分科会の行政との繋がりがあり方で、地道な活動しながら、実は繋がっているというように、底辺から行政と繋がっていくことで、少し参画と協働のあり方も可能性があるのかなと思いました。

今日ここにおられる方々は兵庫県を代表する中間支援あるいはNPOの代表者の方々です。皆さんキラキラ輝いていて、すごい活動をされています。でも、その底辺にある、白鳥がまるで足をかいて優雅に泳ぐように、それがあからこそ本当の参画と協働が今まで実現してきたと思います。これを次の世代に繋ぐことで、新たな発想に基づく参画と協働が展開できればと思っていますし、ここに今日来られた皆様方もまた、地元地域でのそれぞれの活動に邁進していただきますようお願いします。